

彫器

— 西北九州における縄文時代の石器研究 五 —

橘 昌 信

(一)

西北九州の縄文時代の遺跡において、後期旧石器時代の「石刃」あるいは「石刃状剥片」と形態的に極めて類似した黒曜石製の剥片が知られている。この剥片に対して「縦長剥片」なる名称を用いることにしている。¹

この縦長剥片は、佐賀県・長崎県・福岡県を中心とした、いわゆる西北九州地域の縄文時代の遺跡において出土しており、遺跡数は五〇個所を超えている。この数はこの地域の縄文時代の遺跡数から考えて、かなり普遍的な存在とみなされる。縄文時代は約八千年間続いたと考えられ、その間が早期・前期・中期・後期・晩期と五期に区分されている。縦長剥片はこの五期の中で、中期と後期に顕著に認められ、前期・晩期には少ない。なお早期については不明である。

このように、縄文時代の中・後期を主体として、西北九州一帯の縄文時代遺跡には、黒曜石製の縦長剥片、およびそれを素材に用いた石器群が存在するのである。この石器群を持つ文化に対して、「縦長剥片石器文化」という仮称を用いている。この文化は、「鈴桶型縦長剥片剥離技術^{すずおけ}」^{2,3}をはじめとして、縦長剥片を素材にした剥片

4
5
6
7
8
9
10
鉄・石鋸・サイドブレイド・つまみ形石器、石鋸など西北九州以外の地域の縄文文化では、ほとんど認めることが出来ない石器群が存在するのである。これらの石器群のほかにも、西北九州型の結合式鈎針や土器底部の海棲哺乳類骨の圧痕など、縄文時代の中・後期の時期以外では皆無に近い状態であり、しかも西北九州の地域において集中的な出土例が知られている。以上の遺物が一遺跡ですべて揃うわけでなく、時期的に全く同時に存在するものでもない。また、その分布域が常に重なるものでもない。しかしながら、これらの遺物が、鈴桶型縦長剥片剥離技術を基礎とする縦長剥片石器文化を構成する上で重要な要素になり得ることは否定できないであろう。

縦長剥片石器文化を構成する剥片石器として挙げた中で、石鋸とサイドブレイドは組合せ石器と考えられるものであり、その存在は特に注目される。すなわち、この石器は普通にみられる石器のように単独に用いるのではなく、複数の石器を骨製あるいは木製の柄（シャフト）の側面に装着して使用される組合せ道具の刃部になるのである。組合せ道具としての石鋸やサイドブレイドを考える上で、必要不可欠な石器として「彫器」Graving-toolの存在が問題となる。すなわち、骨や木のシャフトの側縁に沿って細い溝を彫るための道具である。この溝を彫る以外にも、各種の木器や骨角器を製作する過程で、彫ったり・削ったりする石器（道具）の存在は大いに考えられてしかるべきである。そこで、この小論では西北九州における縄文時代の彫器の存在を明らかにし、さらに縦長剥片石器文化の石器群の一要素としての位置づけを行ないたい。

(二)

彫器（グレイバー・ビュアリン）は世界的にみて、後期旧石器時代に発達した代表的な剥片石器の一つである。

特にヨーロッパにおいては、彫器の発達と呼応して、骨製・角製・牙製の各種の道具が出現してくる。またフランスやスペインなどにおいては洞窟壁画がみられ、これも彫器の盛行と結びつけられる。骨角器や壁画の存在が彫器としての石器を注目させ、彫器の機能や用途を逆に示唆していると言うべきであろう。日本の後期旧石器時代（先土器時代）にも彫器と呼称されている石器が存在している。特に東日本の旧石器時代の諸遺跡に顕著であるが、西北九州の遺跡においても知られている。

彫器は一部の特異なものをのぞいて、大部分は剥片を素材に用いており、その剥片の端部に細長い槌状の剥離（槌状剥離）によって彫刀面（彫刻刀面）が設けられた石器である。彫器がその名称を示すような機能を持っていたかどうかについての認定は他の多くの石器と同様に困難であり、そのため彫刀面の有無が彫器の判断の基準になっている。彫刀面が設けられた石器である彫器は、彫刀面の先端やその縁辺および縁辺に接する面に使用の結果残されたと判断できる刃こぼれや擦痕が観察され、彫刀面がこの石器の刃部であることは明らかである。それゆえ彫器の分類では、彫刀面の作り出される位置や彫刀面を設ける際の打面の状態などによって行なわれている。いずれにせよ、彫器は後期旧石器時代の石器組成の重要な一員であり、形態的・技術的な研究が行なわれている。またその機能や用途についても使用痕の微視的な観察から究明されつつある。¹³

一方、西北九州の縄文時代の遺跡で、彫刀面が設けられた石器が注目されはじめたのは比較的新しく、昭和四〇年代に入ってからのことである。彫器は縄文時代に普遍的に見られる石器と比較して、形態的・技術的に極めて特殊であることや、遺跡での出土頻度が低いことなどの理由で、縄文時代の彫器についての研究はほとんど進展しないように見受けられる。そのような状況の中にあつて、最近、西北九州の縄文時代遺跡の報告書に散

発的であるが彫器の報告がみられる。そこで、西北九州の遺跡で出土している具体的な彫器にまず焦点をあてることにしたい。

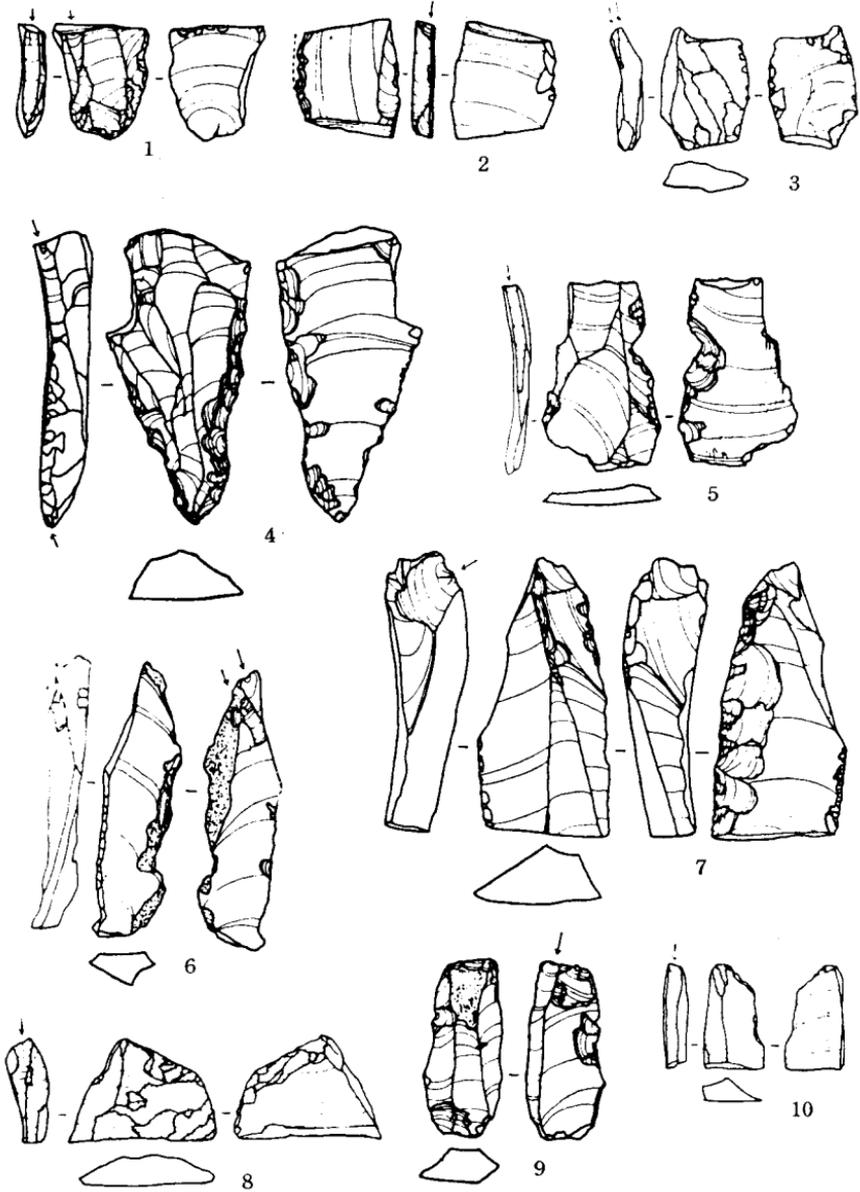
(三)

西北九州の縄文時代の遺跡で彫器を出土している遺跡は一八個所知られている。それらの遺跡の彫器と、石器組成、時期などをみることにする。

1. 柏田遺跡¹⁴(福岡県春日市上白水)

縄文時代後期中葉を主体とする時期の遺構・遺物が発見されている。縄文土器の出土量もさることながら、石器の数、特に黒曜石製の剥片石器が卓越している。二〇〇〇点近い石器のうち、その約九割が黒曜石製の剥片石器で占められている。主要な石器としては、石鏃、つまみ形石器、刃器、削器・搔器、石錐などがある。ほかに、サイドブレード・台形状石器などの組合せ道具の刃部と考えられる石器が四一点ある。問題となる彫器は、その認定に一抹の不安を残すものを含めて二九点も出土しており、確実に彫器とされるものだけでも二〇点を数えることができる。彫器を出土している他の遺跡の大半が一〜二点で、多くても五〜六点という出土状況から考えて、極めて異例と言えよう。典型的な彫器を図示して、その特徴を述べる。

①〜⑭は柏田遺跡出土の彫器で、旧石器(先土器)時代の彫器・彫刻刀と全く同様な方法で製作されていると考えられるものである。すなわち、比較的厚みのある縦長剥片を素材に用い、剥片の側辺に沿って桶状剝離を施して彫刀面を作っている。彫刀面が作り出される位置と彫刀面を設ける際の打面の状態から五類に大別できる。



第1図 柏田遺跡(1~10) (縮尺 $\frac{2}{3}$)

①～⑤は縦長剥片の平坦な面を打面にして、その一端から槌状剥離を施しているものである。単打彫刻刀 (Single blow Graver) とか、側刃型彫器と呼ばれる。Ⅰ類としておく。打面に用いられた平坦な面は、素材の剥片の剥離作業ですでに形成されている断口面 (折れ面) と考えられるものと、打面形成という目的で意図的に折断したと判断できるものがある。④の平坦な打面は剥片の主要剥離面と並行する方向Ⅰ彫刀面とは直交するⅠでの折断と考えられる。⑤は④とは逆に、主要剥離面と直交する方向での折断が考えられる。なお④は彫刀面と反対の側面に丹念な調整加工が施され、削器の刃部が作られている。彫器と削器の複合石器である。

⑥⑦はⅠ類のように、彫刀面を設けるための平坦な打面を持ってなく、彫刀面が素材の一部を斜めに横切っている彫器で、斜刃型とされるものである。これをⅡ類としておく。⑦は彫刀面と逆の側辺の主要剥離面に浅い鱗状の調整が行われており、削器をかねているものと考ええる。

⑧～⑩は彫刀面を設けるための打面に調整の剥離が施されているもので、いわゆる角形彫刻刀 (Angle-Graver) である。⑧⑨は打面の調整剥離が両面に行われている。⑩は打面と彫刀面が交じわる部位と、主要剥離面の中央に使用痕が観察される。⑧～⑩をⅢ類とする。

⑪～⑬は素材とした剥片の両側縁に彫刀面が作られたものである。槌状剥離の打面形成が、槌状剥離面と反対の方向からの槌状剥離によって準備されている。すなわち、彫刀面が互いに交叉することになり、山形に尖った刃先となる。Bevel-flute と分類される彫器と類似している。交叉刃型ともいわれるが、ここではⅣ類とする。

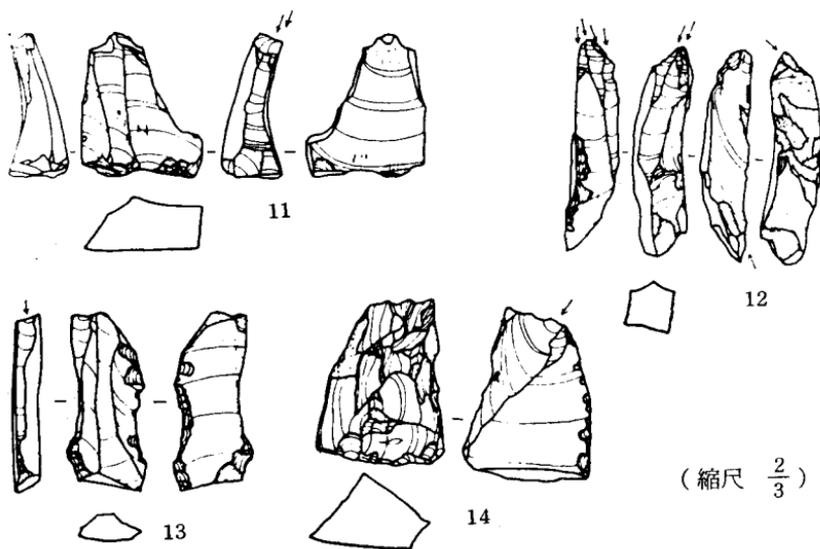
⑭は彫刀面が主要剥離面に大きくねじれているものである。これまでの彫器は彫刀面が側縁に沿って設けら

れている点で異なっている。Flate Graver (平担彫刻刀)、あるいは平刃型と呼ばれるものに相当する。これをⅤ類とする。

以上のように、柏田遺跡では五類に大別される彫器が出土しており、すべて黒曜石製である。これらの彫器はいずれも、後期旧石器時代の彫器の中に認められるものであり、それらと符合する彫器が、西北九州の縄文時代に見られることは注目に値する。以下、柏田遺跡出土の彫器の分類にしたがって、各遺跡の彫器を観察する。

2 岩下洞穴 (長崎県佐世保市松瀬町)¹⁵

岩下洞穴では彫器が、Ⅰ層から一点、Ⅱ層から三点、Ⅳb層、Ⅴ層からそれぞれ一点出土している。各層の時間的な位置づけについては、その層から出土している遺物、特に土器型式にたよらざるを得ないわけである。しかし各層ともかなり時間的な差を持つ土器が同一層から出土しているため、彫器の時期決定には明確さを欠く。それで、彫器出土の各層については、層位的な事実を基



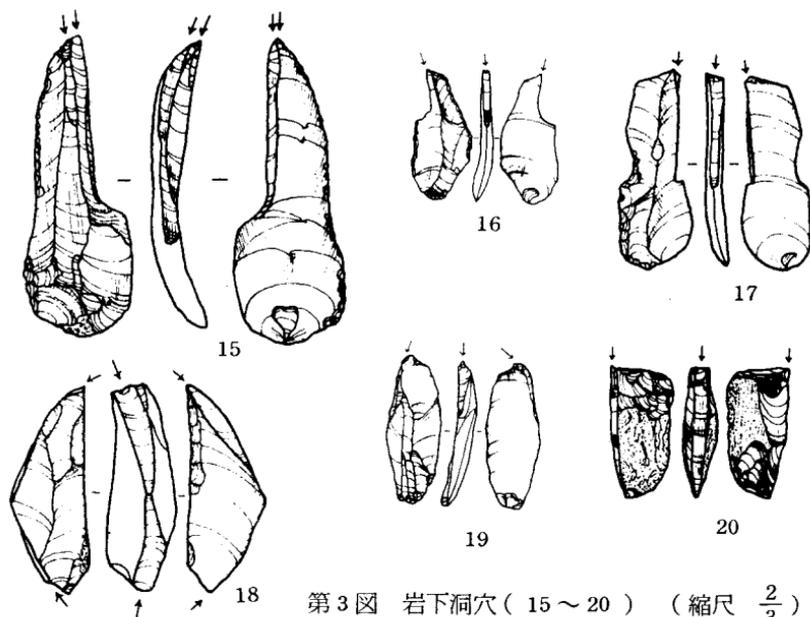
(縮尺 $\frac{2}{3}$)

第2図 柏田遺跡 (11~14)

本に土器型式とその出土量、石器組成などから極めて概略的になるが、主体となる時期については次のように把握しておく。Ⅰ層は縄文時代後期、Ⅲ層は中期～前期、Ⅳb層は前期～早期、Ⅴ層も前期～早期。

⑮はⅠ層出土の彫器で、黒曜石製の縦長剥片を素材に用いている。縦長剥片の末端に小さな調整を行い、そこを打面として二条の槓状剥離によって彫刀面を形作っている。彫器Ⅲ類である。

⑯～⑲はⅢ層出土の彫器で、やはり黒曜石の縦長剥片が素材になっている。⑯は彫刀面を作るための打面に調整が施されている。Ⅲ類。⑰は縦長剥片の打面と逆な位置の平坦な面から一側辺に沿って槓状剥離が施されているⅠ類の彫器である。⑱は上下の両端から、素材を斜めにたち切るような彫刀面が設けられている。異方向からの二条の彫刀面は側縁中央で接している。Ⅱ類の彫器として分類され得るであろうが、上端側縁の主要剥離面に調整が施されており、これと彫刀面との関連が問題となる



第3図 岩下洞穴(15～20) (縮尺 $\frac{2}{3}$)

う。Ⅲ層出土の石器の中に、石鋸・サイドブレイドと判断できるものが存在する。

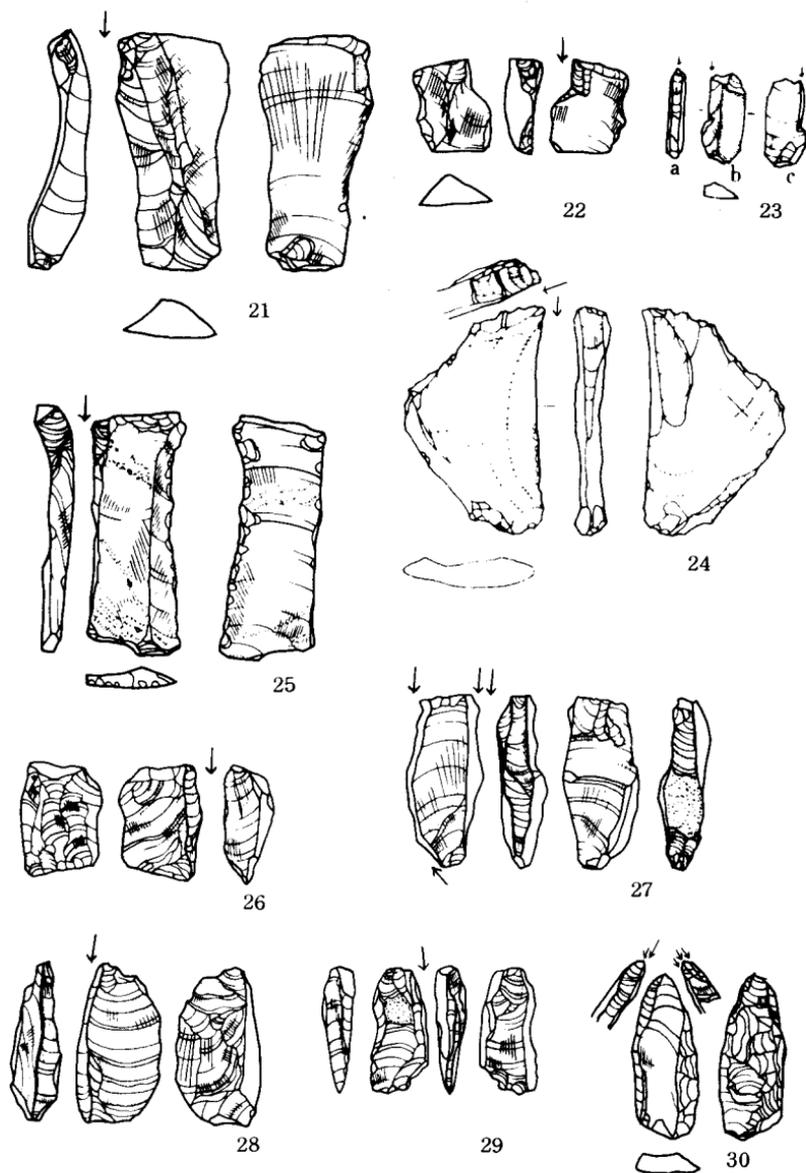
⑭はⅣb層出土。彫刀面の形作るための打面に小さな調整剥離が施されており、Ⅲ類彫器に分類される。素材に黒曜石の縦長剥片が使用されている。しかし、この層の石器組成の中には縦長剥片を素材にした石器が少ない。⑯はⅤ層出土で、これまで五点の彫器がいずれも縦長剥片を素材にしているのに対し、これは表裏の一部に自然面が残っている。彫刀面は平坦な打面からの槌状剥離によって作られている。彫器Ⅰ類として考えられるが、素材が特殊な点は注目される。

岩下洞穴では前々早期と考えられる層から二点の彫器が出土している。これがはたして前期なのか、早期なのかそれとも他の時期の所産か。これは縄文時代の彫器を考える上で、特にその出自や系譜を究明する上で重要な問題である。

3 四箇周辺遺跡¹⁶₁₇ (福岡市西区四箇田)

四箇A地点 縄文時代後期後半の低湿地の遺跡で一部泥炭層がある。土器・石器などの好資料が豊富であり、石器の中では黒曜石製の剥片石器の占める率が高い。種類としては、剥片鋸を含む石鋸・搔削器・刃器・つまみ形石器・石錐、それにサイドブレイド・彫器などが存在する。

⑳㉑は黒曜石の縦長剥片を素材に、平坦な一端を打面にした彫刀面が一側縁に設けられている。彫刀面の打面には彫刀面と直交する方向でのリングが観察され、意図的な折断による可能性がある。槌状剥離は二点とも短い。四個J-10i地点 弥生時代中期の遺構・遺物と縄文時代後期を主体とする土器・石器が出土している。縄文時代後期と考えられる剥片石器では、黒曜石製の石鋸・刃器・搔削器・サイドブレイド・楔形石器などが量的に



第4図 四箇遺跡A地点(21・22) 四箇遺跡J-10i(23)
 四箇遺跡J-10l(24) 四箇東遺跡(25~30) (縮尺 $\frac{2}{3}$)

勝っている。他にはつまみ形石器・石錐・石匙・尖頭器などがある。

⑳ は黒曜石製の小形の彫器で、一側縁に彫刀面を設けている。彫刀面の打面には小さな調整が施されている。四箇 J-10 i 地点 10 i 地点と隣接しており、古墳・弥生時代の遺構遺物と、その下層から縄文時代後期・前期の土器・石器が出土している。遺物の量は少なく、石器も同様である。前期の剥片石器では石鏃・石錐・搔器・尖頭状石器などが出土しているが数は数点ずつと極めて少ない。それに縦長剥片を素材にした石器が認められない。後期の剥片石器もやはり少量しか出土していないが、こちらは縦長剥片を用いた刃器・サイドブレイド、楔形石器などがある。

㉑ は縄文時代前期の壘式土器や曾畑式土器に共伴した彫器である。黒曜石製の不定形な横長剥片を素材に用いて、その二辺に槌状剥離が施されて彫刀面を形成している。彫刀面が交叉しており、Ⅳ類の彫器に分類できる。縄文時代前期の確実な資料であり、しかも縦長剥片が用いられてないことは注目される。

四箇東遺跡 縄文時代後期後半の低湿地の遺跡であり、出土遺物の内容や時期については、四箇 A 地点とほぼ同様である。石器は黒曜石製の剥片石器が顕著で、石鏃、刃器、つまみ形石器、サイドブレイド、搔削器、楔形石器などが存在する。

㉒ は黒曜石製の縦長剥片を素材して、この素材の末端側からの槌状剥離によって短い彫刀面を作っている。彫刀面の打面には調整が施されており、彫器のⅢ類として分類される。㉓ は平坦な面を打面にして、一側辺に沿った槌状剥離によって、彫刀面が作られている。なお、㉔ は下端からの細長い槌状剥離が見られる。㉕ は上端からの槌状剥離が両側辺に施され、さらに下端の一側辺にも短い槌状剥離が施されている。三個所の彫刀面の打面

には調整が行われている。

⑳ は厚味のある剥片の側面に沿って彫刀面が設けられており、その打面には調整が施されている。㉑ 類彫器。

㉒ は大小五条の彫刀面が先端のほぼ中央で交叉している彫器で、㉑ 類として分類した彫器の典型的なものである。

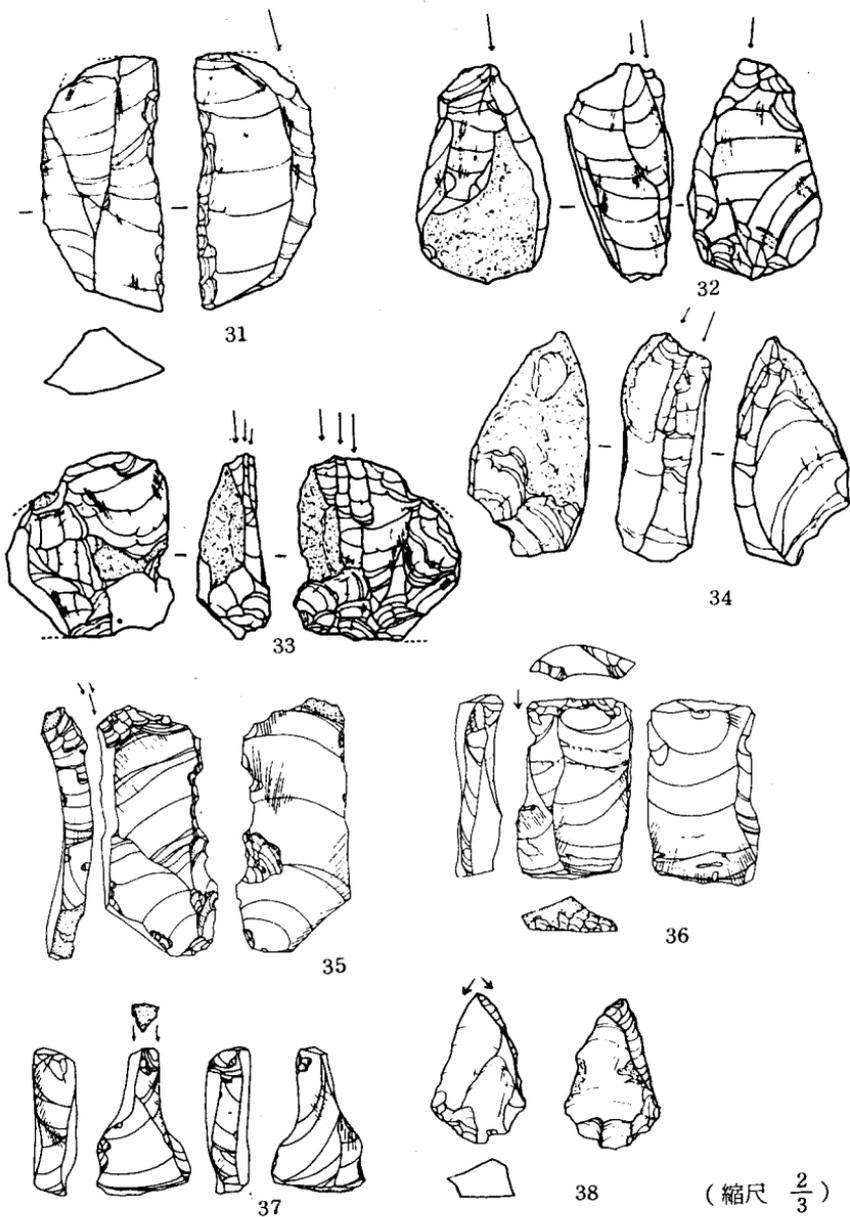
4 深原遺跡¹⁸ (福岡県筑紫郡那珂川町)

深原遺跡は縄文時代早期の押型文土器を主体とする大遺跡である。縄文時代早期の遺物のほか、前期、後期、それにごく少量であるが中期のものが出土している。当遺跡から出土している大量の石器の大半は、縄文時代早期の前期の所産と考えられる。地点によっては、後期の土器に共存する黒曜石製の刃器やつまみ形石器が存在する。彫器は四点出土しているが、その明確な時期については明かでない。

㉓ は黒曜石製の縦長剥片を素材に、その側面に沿って彫刀面が設けられている。彫刀面が打面と接する部位が欠損しているが、平坦な面をそのまま打面として利用した、㉑ 類の彫器であろう。この彫器の時期は縄文時代後期と考えられる。㉔ ㉕ の彫器はいずれかの面に黒曜石の自然面をもっており、厚味のある不定形な剥片が素材に用いられている。二、三条の彫刀面は側縁から表裏どちらかの面にまでおよんでいる。彫刀面を設ける際の打面の状態は、㉔ は自然面を、㉕ ㉖ は一回の剥離による平坦な剥離面をそれぞれ利用している。㉔ ㉕ は㉑ 類、㉖ は㉑ 類とされる。この三点の時期は不明であるが、前々早期が予想される。

5 ケイマンゴ遺跡¹⁹ (長崎県西彼杵郡西海町)

ケイマンゴ遺跡は長崎県西彼杵半島の北端に位置する縄文時代晩期の遺跡である。縄文時代の石器は一八〇



第5図 深原遺跡(31~34) ケイマンガ遺跡(35~37) 宮下遺跡(38)

(縮尺 $\frac{2}{3}$)

点であり、石鏃が最も多く、次に石斧、サイドブレード、搔器の順になっている。当遺跡のサイドブレードは一点あり、好資料である。彫器は五点出土しており、縦長剥片を素材にしたものと、不定形な剥片を使用したものが存在する。

③⑤は縦長剥片を使用したもので、彫刀面を設けるための打面は調整されており、一側辺に沿って槓状剥離が施されている。③⑥もやはり縦長剥片を素材に用い、一側片に彫刀面を作っている。槓状剥離の打面の一部に自然面を残すが、彫刀面との接点には調整が行われている。③⑤③⑥共にⅢ類の彫器である。③⑦はやや不定形な剥片の自然面を打面にして、両側辺に彫刀面を形成している。彫器のⅠ類に分類される。

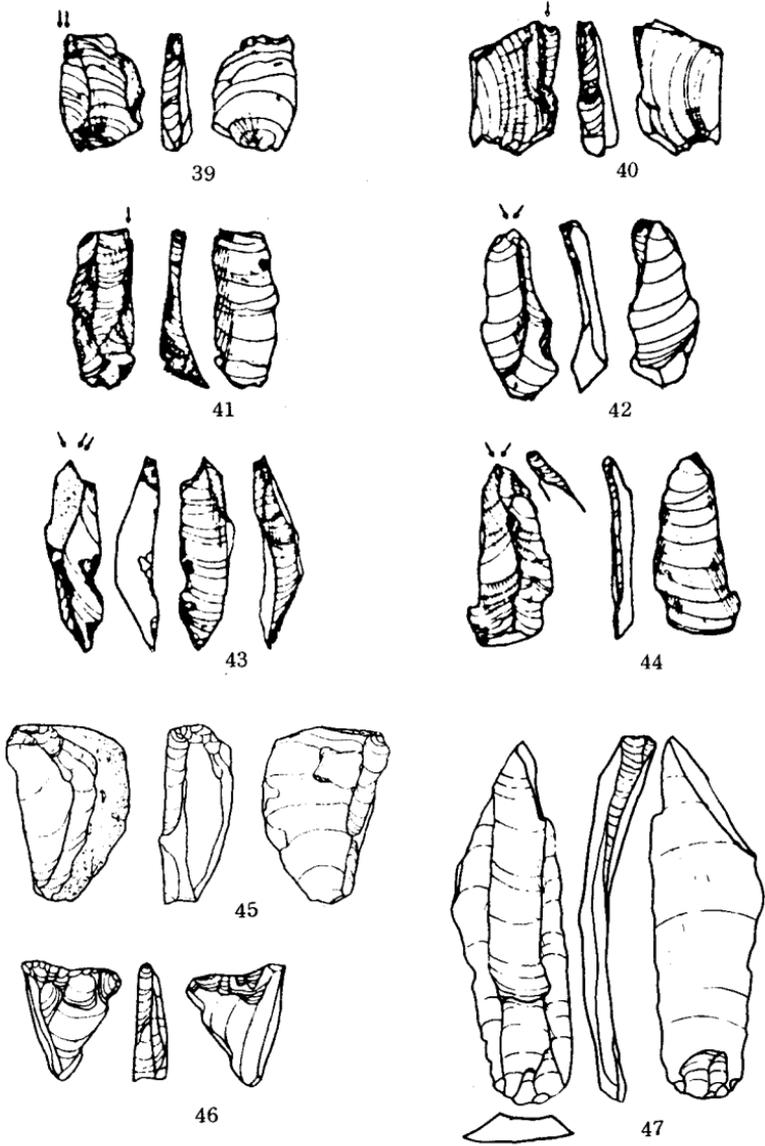
6 宮下遺跡²⁰ (長崎県南松浦郡富江町)

宮下遺跡は、五島列島の福江島の南端に位置する縄文時代の貝塚で、縄文時代後期を主体に、中期・前期の遺物が出土している。縄文時代後期の剥片石器は縦長剥片を使用したものが多い。彫器は一点あり、石鋸も一点出土している。

③⑧は黒曜石製の縦長剥片を素材にして、打面と逆の一端に、左右から彫刀面が交叉するように槓状剥離が施されている。彫器Ⅳ類の典型的な資料といえる。

7 下本山岩陰²¹ (長崎県佐世保市下本山町)

下本山岩陰は縄文時代前期の遺跡で、曾畑式土器の好資料が多量に出土している。石器の大半は剥片石器であるが、石材は黒曜石とほぼ同じ量、安山岩・玄武岩が使用されている。石器の種類は石鏃・搔削器・使用痕のある剥片などが量的に多く、ほかにつまみ形石器、石鏃、彫器などがある。



第6圖 下本山岩陰(39~44) 深堀遺跡(45·46) (縮尺 $\frac{2}{3}$)
鈴桶遺跡(47)

③④は黒曜石製の剥片の側面に沿って彫刀面が設けられている。ただ、③④は縦長剥片の長軸に沿ってであるが、④は剥片をたち切るように彫刀面が形成されている。いずれも彫刀面を施すための打面は調整されていない。彫器Ⅰ類に分類できる。④⑤は二方向から交叉する彫刀面によって尖った刃部が形成されているⅣ類彫器である。素材はいずれも黒曜石の縦長剥片を用いている。

8 深堀遺跡²²（長崎県長崎市深堀町）

深堀遺跡は弥生時代と縄文時代の遺跡で、縄文時代は晩期と後期の二時期あり、遺物は後期のものが多い。晩期の剥片石器に彫器と楔形石器がある。後期にもやはり彫器・楔形石器があり、ほかにサイドブレード・石鋸・鋸歯状の石銚も出土している。

④⑤は縄文時代後期の彫器で、自然面を一部にもつ厚手の黒曜石の縦長剥片を素材に使用している。彫刀面は自然面を打面として、一側面に沿って設けられている。彫器のⅠ類に分類される。

④⑥は縄文時代晩期の彫刻刀で、彫刀面を設けるための打面は表裏共、調整が行われている。黒曜石製。Ⅲ類に分類できる。

9 鈴桶遺跡²³（佐賀県伊万里市二里町）

鈴桶遺跡は黒曜石製の縦長剥片（刃器・刃器状剥片）と鈴桶型石核を多量に出土した遺跡として周知されている。遺物は先の剥片・石核のほか、先土器（旧石器）時代のナイフ形石器、尖頭器、搔削器と共に彫器様石器が出土している。この彫器様石器の時期については、素材の縦長剥片や剥片鏃の存在から縄文時代の所産と判断される。

④7は形の整った縦長剥片の打面とは逆の一端に、素材を斜めに横切るような彫刀面が設けられている。彫器Ⅱ類の典型的なものと言えよう。

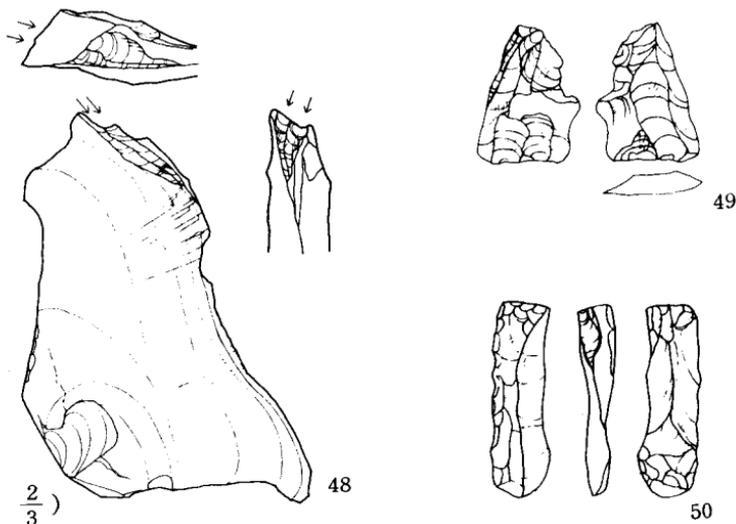
10 大道端遺跡²⁴ (福岡県山門郡瀬高町)

大道端遺跡の縄文時代の時期については、出土土器より中期末から晩期終末までにわたっている。しかし主体となる時期は後期前葉から中葉と晩期前葉から中葉にかけてである。この遺跡から出土している石鏃、搔削器、石斧、楔形石器、それに一点の彫器などの時期については、縄文時代後期と晩期の両者が考えられる。

④8はメノウ製の横長剥片を素材に、その一端から二条の槓状剥離を施して彫刀面を作っている。打面の調整がなく斜め方向に彫刀面が形成されていることからⅡ類に分類できる。メノウという石材、それに極めて大形である点で特異な存在である。

11 沖ノ島社務所前遺跡²⁵ (福岡県宗像郡玄海町)

沖ノ島社務所前遺跡の縄文時代の時期は、前期、中期そ



(縮尺 $\frac{2}{3}$)

第7図 大道端遺跡(48), 沖ノ島社務所前遺跡(49), 元松原遺跡(50)

れに晩期の三時期があり、そのうち晩期の剥片石器九点の中に一点彫器が含まれている。玄海灘の孤島という立地の遺跡の出土だけに興味もたれる。

④⁹は黒曜石の剥片の主要剥離面側の一端に二条の彫刻刀面が設けられている。打面は特に調整されていない。彫器のV類である。

12 元松原遺跡²⁶(福岡県遠賀郡岡垣町)

元松原遺跡は縄文時代前期後葉と後期前葉を中心とする遺跡である。後期の剥片石器の中に彫器が一点存在する。

⑤⁰は黒曜石の剥片を素材に、その一端に調整を施して彫刀面の打面を準備している。彫刀面は比較的短い。この彫刀面が設けられている側面と反対の一面は、丹念な調整が施され、削器の刃部を形作っている。彫器と削器の複合石器である。彫器はⅢ類に分類できる。

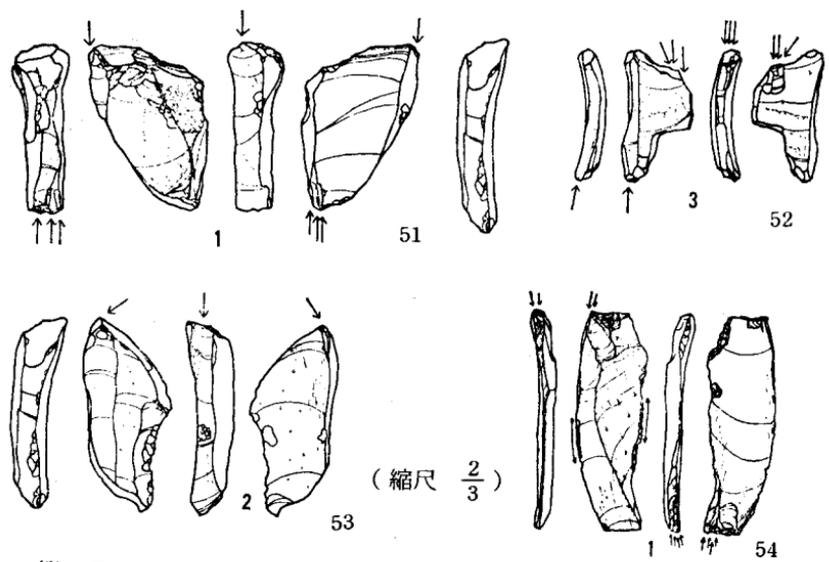
13 岩谷口第一岩陰遺跡²⁷(長崎県北松浦郡世知原町)

岩谷口第一岩陰遺跡は福井洞穴や岩下洞穴に隣接して存在する縄文時代の遺跡である。縄文時代早期から晩期の各時期の遺物が出土している。黒曜石製の縦長剥片を素材にした剥片鏃・鋸歯状の石鏃・つまみ形石器・刃器などと共に三点の彫器が出土している。これらの剥片石器の時期は他の多くの石器と同様、不明である。ただ当遺跡から出土している土器の数量からすれば、縄文時代前期の可能性が大きいであろう。

⑥¹は分厚い黒曜石の剥片を素材に、剥片の平坦な面を彫刀面の打面として、一側面に沿って細長い槌状剥離が施されている。さらに、逆の一端では彫刀面の末端を打面に利用して、三条の短い槌状剥離が加えられている。

彫刀面の状態から分類すればⅠ類とⅣ類の両者に区分される。⑤②は厚手の黒曜石の縦長剥片を用いて、末端の平坦な面を打面にした彫刀面が設けられている。Ⅰ類の彫器である。⑤①②の主要剥離面の一部に不規則な細かい擦痕が残されており、彫器の用途の一端をうかがわせる。⑤③は小形の彫器で、黒曜石の薄手の縦長剥片を素材にしている。彫刀面は上下の両端に施されており、彫刀面の打面は上下ともに調整が行われている。Ⅲ類の彫器として分類できる。

岩谷口第二岩陰遺跡 第一岩陰遺跡と約二百米ほど離れた位置に所在する縄文時代の岩陰遺跡である。彫器は一点出土しており、共存土器から晩期の可能性が強い。ほかの石器としては、石鏃・削器・つまみ形石器などが出土しているが、その数は少ない。不定形な黒曜石製の剥片と共に少数であるが縦長剥片がみられる。⑤④はこの縦長剥片を素材に利用した彫器である。一側辺の上端に彫刀面の打面が準備され、二条の彫刀面が設けられている。これと逆に、もう一方の側辺に沿って下端の方向から彫刀面が形成されて



第8図 岩屋口第1岩陰遺跡(51~53) 岩屋口第2岩陰遺跡(53)

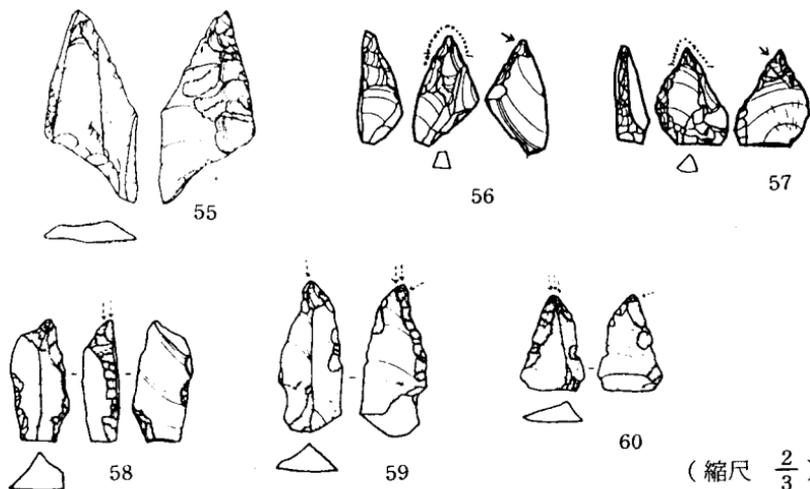
おり、打面はやはり調整している。両側辺のほぼ中央には使用によると考えられる刃こぼれが観察される。彫器のⅢ類である。

以上、①～⑤までの資料は縄文時代の所産と考えられるものであり、剥片の一端に彫刀面をもつ石器である。これらの一三遺跡以外で、彫刀面を設けている石器が出土している遺跡として、次の六箇所を挙げることができる。

縄文時代の後期の遺跡としては、長崎県脇岬遺跡²⁸ 福岡県榎坂貝塚²⁹がある。この両遺跡からは彫器のほかに、サイドブレイド・石鋸が出土している。一方、晩期の遺跡では佐賀県宇木汲田遺跡³⁰、長崎県小浜遺跡³¹、福岡県十郎川遺跡³²がある。また、後期あるいは晩期の遺跡では、福岡県千里シビナ遺跡³³がある。

現在、西北九州の縄文時代遺跡の一九遺跡で、彫器が出土しているのである。

⑤⑥は先の彫器と関連があると考えられる縄文時代の

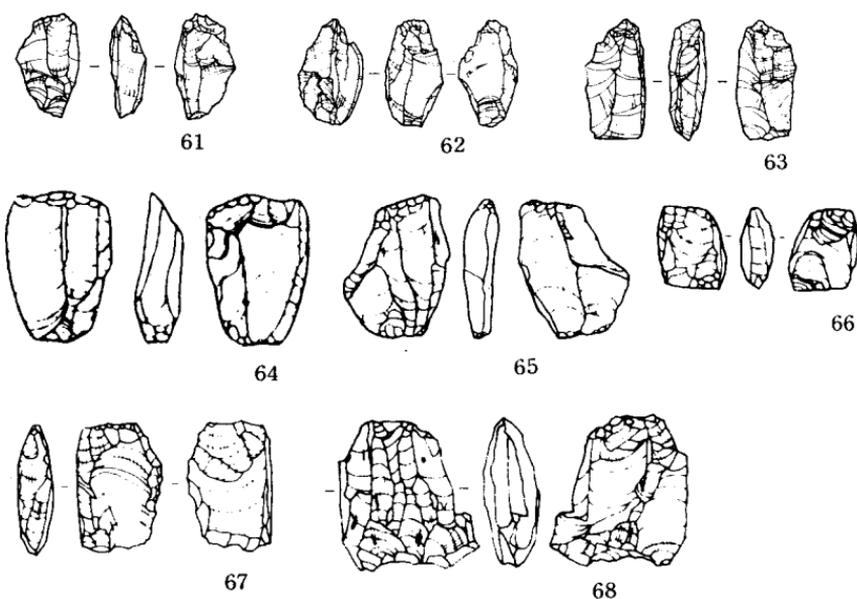


(縮尺 $\frac{2}{3}$)

第9図 深堀遺跡(55)、山鹿貝塚(56・57)、柏田遺跡(58～60)

剥片石器である。いずれも剥片の一端に尖った刃部を持っており、しかもそれらの尖った刃部は上方あるいは側方からの細く短かい複数の調整剥離によって形作られている。刃部の調整剥離は小さな彫刀面を彷彿させるものである。尖った先端とその周辺に、石錐とは異なる使用痕が観察される。細長い彫刀面をもつ石器と同様の機能・用途が予測される。(55) (60)の石器は彫器のⅡ類として把握する。これらの石器はすべて縄文時代後期の時期の所産である。

(61) (68)は「曾根型石核」「ピエス・エスキュー」あるいは「楔形石器」と呼称されている縄文時代の石器である。³⁴⁾この石器は上端および下端からの大小の細長い剥離面が認められる。縦断面は紡錘形になっている。またこの細長い剥離面と同時に、両端には短いステップフレイキングが顕著である。上・下両端の多くには使用によると考えられる潰痕や磨痕が観察される。以上の様な特徴からこれらの石器は、楔のような機能・用途をもつものと考えられる。この



第10図 楔形石器 大道端遺跡(61~63), 深堀遺跡(64・65) 四箇遺跡J-10 i (66・67) 四箇遺跡J-10 l (68)

楔形石器は骨や木を対象にした彫器と関連の深い石器であろう。

(四)

以上のように、西北九州の縄文時代の石器の中に、先土器(旧石器)時代の彫器と全く同様な石器が存在するのである。その遺跡数は何らかの形で報告されているもので一四個所、報告はされていないが明かに出土しているもの六個所を確認することができ、資料数は六〇点を越えている。(表1)

さて、これらの彫器の時期は後・晩期が圧倒的に多く、また素材の大半が黒曜石の縦長剥片を用いている。彫器は西北九州一帯の縄文時代後半の「縦長剥片石器文化」を構成する石器群の一つとみなすことができる。ただ彫器の素材で、深原遺跡や岩下洞穴Ⅴ層出土のものでは、縦長剥片が用られていない。実は、この両遺跡出土の彫器であるが、いずれも縄文時代早期ないし前期の時期が考えられる資料である。また、四箇遺跡J-101地点の彫器も黒曜石の縦長剥片が素材にもちいられていない。これは縄文時代前期の確実な資料である。

彫器の時期と素材の関係については、中期の時期は不明であるが、後・晩期では縦長剥片が使用され、早・前期では縦長剥片以外の素材が選択されていたという一つの傾向が示唆されている。すなわち、西北九州の縄文時代に認められる彫器は、黒曜石製の縦長剥片を素材に用いて発達した石器の一つとみなすことができる。同時に、縦長剥片石器文化が盛行する以前の縄文時代早期・前期にも存在した石器ということになる。

早・前期における彫器の存在は彫器の出自という重要な問題をかかえている。西北九州の縄文時代の彫器で、もっとも古いものとして、先にも挙げた岩下洞穴のⅣb層、Ⅴ層、それに深原遺跡の彫器がある。この両遺跡の

遺跡名	時期	彫器		楔形石器	サイド ブレイド	石 鋸	縦長剥片
		点数	分類				
1. 柏田遺跡	後期	20	I~VI		○		○
2. 岩下洞穴	後期	1	III				○
	中~後期	3	I~III		○	○	○
	前~早期	2	I・II				○
3. 四箇周辺遺跡							
A地点	後期	2	I		○		○
J-10 1地点	後期	1	III	○	○		○
J-10 1地点	前期	1	IV				○
四箇東遺跡	後期	5	I・III・IV	○	○		○
4. 深原遺跡	後期	1	I				○
	前~中期	3	I・II				
5. ケイマンゴー遺跡	晩期	5	I・III		○	○	○
6. 宮下遺跡	後期	1	IV			○	○
7. 下本山岩陰	前期	5	I・IV				○
8. 深堀遺跡	後期	1	I・VI	○	○	○	○
	晩期	1	III	○			○
9. 鈴桶遺跡	後期(?)	1	II				○
10. 大道端遺跡	後・晩期	1	II	○			
11. 沖ノ島社務所前遺跡	晩期	1	V				
12. 元松原遺跡	後期	1	III				
13. 岩谷口第1岩陰遺跡	前期(?)	3	I・III				○
岩谷口第2岩陰遺跡	晩期	1	III				○
14. 脇岬遺跡	後期				○	○	○
15. 榎坂遺跡	後期				○	○	○
16. 宇木汲田遺跡	晩期				○		
17. 小浜遺跡	晩期				○		○
18. 十郎川遺跡	晩期				○		○
19. 千里シビナ遺跡	後・晩期						
20. 山鹿貝塚	後期(?)	1	VI				○

表1 西北九州における縄文時代の彫器出土遺跡一覧

彫器は早期あるいは前期の可能性が極めて強い。しかし、それが早期なのか、あるいは前期なのかの決め手を欠いている。それにごくわずかであるが縄文時代後期の可能性が残されていることになる。この両遺跡に対して、四箇遺跡J-10-1地点出土の彫器は、縄文時代前期後半の壘式土器・曾畑式土器に共伴した資料であり、もっとも古い時期の確実な彫器と言える。

現在までのところ、縄文時代早期の時期の確実な資料はなく、後期旧石器時代の彫器との関連を積極的に結びつけることは困難であり、不明と言わざるを得ない。

次に彫器の用途についてであるが、彫器の刃部の先端および彫刀面と主要剥離面とが接するエッジを中心に使用痕が観察されるものが存在する。この使用痕のあり方は、後期旧石器時代のそれと類似している。彫器の具体的な用途や対象物については明かでないが、いずれにせよ、木器や骨角器などの加工具の一つと考えられる。また、各種の石器の柄などの製作にも用いられたことは想像に難くない。

西北九州の縄文時代の遺跡において彫器と共に出土している石器に、組合せ道具と考えられるサイドブレードや石鋸、それに石銚があり、また楔形石器などもある。これらの石器は彫器の存在と深い関連をもち、西北九州における縦長剥片石器文化を構成している重要な要素と考える。

参考文献

1. 橘昌信「縦長剣片―西北九州における縄文時代の石器研究―」史学論叢九 一九七八
2. 杉原莊介・戸沢充則・横田義章「九州における特殊な刃器技法」考古学雑誌五一―三 一九六六
3. 横田義章「西北九州における縄文時代の一剣片石器群」九州歴史資料館研究論集二 一九七六
4. 下川達弥「剣片鏃考」長崎県立美術館研究紀要一 一九七三
5. 萩原博文・久原巻二「九州西北部の石鋸・サイドブレイドについて」古代文化二七―四 一九七五
6. 橘昌信「縦長剣片の折断技術とサイドブレイド―西北九州における縄文時代の石器研究四―史学論叢二二 一九八一
7. 片岡肇「いわゆる『つまみ形石器』について」古代文化二七―四 一九七三
8. 橘昌信「石鋸―西北九州における縄文時代の石器研究二―」史学論叢一〇 一九七九
9. 渡辺誠「縄文時代の漁業」考古学選書七 一九七三
10. 三島格「鯨の脊椎骨を利用せる土器製作台について」古代学一〇―一 一九六二
11. M. BURKITT [The Old Stone Age] 1955
12. 加藤晋平・鶴丸俊明「凶録石器の基礎知識―先土器(上)―」一九八〇
13. S. A. Semenov [Prehistoric Technology] 1970
14. 福岡県教育委員会「春日市・柏田遺跡」山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告四 一九七七
15. 麻生優「岩下洞穴の発掘記録」一九六八

16. 福岡市教育委員会「福岡市西区四箇周辺遺跡調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書四七 一九七八
17. 福岡市教育委員会「福岡市西区四箇周辺遺跡調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書六三 一九八一
18. 福岡県教育委員会「深原遺跡」山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告八 一九七八
19. 長崎県教育委員会「ケイマンゴ」遺跡」長崎県文化財調査報告書五二 一九八〇
20. 賀川光夫「宮下遺跡調査報告書・解説編」長崎県文化財調査報告九 一九七一
21. 麻生優「下本山岩陰」佐世保市教育委員会 一九七二
22. 賀川光夫・他「深掘遺跡」人類学考古学研究報告一 一九六七
23. 2.と同じ
24. 福岡県教育委員会「大道端遺跡」九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告Ⅻ 一九七七
25. 橘昌信「縄文時代の石器」宗像沖ノ島 一九七九
26. 岡垣町教育委員会「元松原遺跡」岡垣町文化財調査報告書 4 一九八一
27. 片岡肇「長崎県北松浦郡世知原町岩屋口遺跡群の発掘調査」平安博物館紀要六 一九七六
28. 賀川光夫「脇岬貝塚」日本考古学年報二四 一九七三
29. 小田富士雄「榎坂遺跡」日本考古学年報二四 一九七三
30. 佐賀県唐津市に所在する貝塚を伴う縄文時代晩期の遺跡で、一九六六年に発掘が実施されている
31. 賀川光夫「九州西北部にみられるサイドブレイドについて」考古学ジャーナル一六 一九六八
32. 福岡市西区に所在する遺跡で、一九八一年に発掘調査が実施されている

33. 福岡市西区に所在する遺跡で、一九七七年福岡市教育委員会によって発掘が実施されている。
34. 岡村道雄「ピエスエスキュについて―岩手県大船渡市碁遺跡出土資料を中心として―」東北考古学の諸問題 一九七六

図の引用

第1図および第2図は註14より

第3図⑮⑳は註15より

第4図㉑㉒㉓㉔㉕は渡辺和子氏による。23は註16より。24は註17より。

第5図㉖㉗㉘㉙は註18より。㉚㉛㉜は註19より。

第6図㉝㉞㉟は註21より。㊱は註2より。

第7図㊲㊳は註24より。㊴は註26より。

第8図㊵㊶は註27より。

第9図㊷㊸は註22より。㊹㊺は註14より。

第10図㊻㊼㊽は註24より。㊾㊿は註22より。

㊿㊿は註16より。㊿㊿は註17より。